

Title	スタイン蒐集トルキスタン出土古チベット語：概要 とカタログ作成プロジェクト
Author(s)	武内, 紹人
Citation	内陸アジア言語の研究. 11 p.121-p.137
Issue Date	1996-07
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/15502
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スタイン蒐集トルキスタン出土 古チベット語文書 ——概要とカタログ作成プロジェクト——

武内 紹人

はじめに

スタイン(Mark Aurel Stein)が中央アジア探検により発見将来し現在大英図書館に保管されているいわゆるスタインコレクション中のチベット文書は、パリのペリオコレクションとともに古チベット語文献資料の双璧をなす。敦煌出土の紙文書が主体のペリオコレクションに対して、スタインコレクションには、敦煌出土の紙文書にくわえ、コータンやロブノール地域などシルクロード南道ぞいの諸遺跡から発掘された紙文書ならびに木簡が大量にふくまれている。このように出土地が多様なうえ、大英図書館内部でいくつものグループに分けて保管されていたため、現在までスタイン蒐集チベット文書の全貌は不明のままだった。

そのうち敦煌石窟で見つかった文書については、1962年に Vallée Poussin のカタログが出、そのあと山口瑞鳳氏を中心とする東洋文庫チベット研究委員会による改訂増補版⁽²⁾が出版されつつあることで概要がほぼつかめるようになった。⁽³⁾しかし、敦煌以外の遺跡から出土した文献については、トーマス(F.W.

-
- (1) Louis de la Vallée Poussin, with an appendix on the Chinese manuscripts by Kazuo Enoki: *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*, (Oxford Univ. Press, 1962).
 - (2) 山口瑞鳳ほか東洋文庫チベット研究委員会編「スタイン蒐集チベット語文献解題目録」第1-12分冊(1977-88, 東洋文庫)——以下「東洋文庫カタログ」と略称。
 - (3) 「東洋文庫カタログ」は、スタイン蒐集チベット文献のうち敦煌出土文書の九割以上をリストアップした優れたものである。しかし、その利用に際してはつぎの2点に留意する必要がある。1) スタインが第二次探検で蒐集し、Ch.(=千仏洞)ナンバーを付したチベット文書は大英図書館(旧 India Office Library)でもグループとして保管されており、「東洋文庫カタログ」はそのグループの全文書をリストアップしている。しか

Thomas) が一部を公刊した以外は、その存在すら知られていない。⁽⁴⁾

シルクロードぞいの遺跡から掘り出されたこれらの文書は、多くが断片で保存状態もわるい。しかし、仏典中心の敦煌文書にくらべヴァラエティに富んだ俗文書が含まれていることが、トーマスの研究から窺える。断片とはいえ言語学・歴史学資料としては敦煌文書に劣らない価値を持っているのである。

筆者は1989年に大英図書館(当時 India Office Library and Records)を訪れ、ミーラーンやマザールターグ出土文書が未整理できわめて悪い保存状態にあるのを見いだした。そこで東洋写本部門の部長(Deputy Director)の Graham W. Shaw 氏とサンスクリット・チベット写本の責任者(Assistant Keeper)の Michael O'Keefe 氏と協議の結果、筆者がカタログを作成し、それにもとづき図書館側が文書の全面的修復をおこなうことになった。以来、1992-94年の科学研究費補助(国際学術研究共同研究)プログラムを中心⁽⁵⁾に5年余りの作業の結果、全文書のカタログと写真を1997-98年にユネスコ東アジア文化研究センターと大英図書館の共同で出版するはこび⁽⁶⁾となった。

ただ、その過程でおおくの予期しない問題がでてきた。とくに、最初にみつかった文書グループ以外の場所にもミーラーン、マザールターグ等出土の文書が散在していることがわかったため、大英図書館中の古チベット文書を網羅的に調査しなおすこととなった。おかげでスタインコレクションの古チベット文献の全貌をほぼつかむことができたように思う。本稿ではカタログ出版に先立

メし、後述するようにスタイン蒐集の敦煌チベット文書をすべてカバーするものではない。2)東洋文庫にあるマイクロフィルムを対象としており原文書そのもののカタログではない。したがって、例えば現在進みつつある修復整理とは連動しない。

(4) F.W.Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents from Chinese Turkestan*, vol. 2, London, 1951. —以下 TLTD と略称。

(5) 研究課題「トルキスタン出土古チベット語文書および木簡の研究」課題番号 04044 101, 平成4年-6年, 研究代表者武内紹人。

(6) *Old Tibetan Manuscripts from East Turkestan in the Stein Collection*, compiled by Tsuguhito Takeuchi, 2 vols: Descriptive Catalogue and Plates, The Centre for East Asian Cultural Studies for UNESCO and the British Library.

ち、これまで明かになったスタインコレクションの古チベット語文献とカタログの概要を紹介したい。

1. スタインチベットコレクションの概要と分類

スタインコレクション中のチベット文献は、いくつかの異なる基準から分類できる。

1.1 スタインが3回にわたっておこなった探検の各々で将来したチベット文献資料をスタイン自身の発掘報告の中から拾いだすと、つぎのようにまとめられる。

第一次探検 (1900-01)

- 1) Endere 出土の紙文書⁽⁷⁾
- 2) Endere 寺院壁面の落書き⁽⁸⁾
- 3) 印石 (コートンで購入)⁽⁹⁾

第二次探検 (1906-08)⁽¹⁰⁾

- 1) 敦煌石窟出土の紙文書と壁書
- 2) コートン地域 (Mazār Tāgh, Sampula, Khādalik, Domoko, Īle-dong, Balawaste, Keriya), ロブ地域 (Mīrān I) 出土の紙文書
- 3) 同上の木簡
- 4) トルファン地域 (Kichik-hassār) 出土の紙文書⁽¹¹⁾
- 5) Mīrān I 出土の印⁽¹²⁾
- 6) カラシャル (Mīng-oi) 出土の壺刻文⁽¹³⁾

(7) M.A. Stein, *Ancient Khotan*, Oxford, 1907; repr. New Delhi, 1981, pp.425-427, Appendix B part 1-iii, Plates CXVII, CXVIII.

(8) *Ancient Khotan*: pp.429-432, Appendix B part iv, Plates XI, XII.

(9) *Ancient Khotan*: pp.210, 219, Plate L.

(10) 下記1) から3) のグループについては, M.A. Stein, *Serindia* (Oxford, 1921; repr. Delhi, 1980-83) 中の記述が多いので General Index: pp.1568-1569 参照.

(11) *Serindia*: p.1166.

(12) *Serindia*: pp.465, 480, Plate LI; T.Takeuchi, *Old Tibetan Contracts from Central Asia*, Tokyo, 1995 (以下 Takeuchi, *Contracts* と略称) pp.108-109.

(13) *Serindia*: pp.1190, 1222, Plate IV.

第三次探検 (1913-15)

- 1) 敦煌石窟出土の紙文書⁽¹⁴⁾
- 2) Mazār Tāgh, Mīrān I, Mīrān XIV, Khādalik, Domoko 出土の木簡と紙文書⁽¹⁵⁾
- 3) トルフアン地域 (Toyuk, Kara-khōja ?) 出土の紙文書⁽¹⁶⁾
- 4) Khara-khoto, Etsin-gol 出土の紙文書⁽¹⁷⁾
- 5) Darkōt pass の岩石碑文⁽¹⁸⁾

このように項目をリストアップしただけではわかりにくいですが、実は第二次探検将来のものが圧倒的に多い。スタインコレクション中のチベット文献の主体は第二次探検将来品 (上記項目 1, 2, 3) である。

1.2 スタイン将来品は周知のように、つぎの4所に分け置かれていた。

- 1) India Office Library and Records (London)
- 2) The British Library, Oriental Collections (London)
- 3) The British Museum (London)
- 4) The National Museum (New Delhi)

3), 4) は、絵や物品が中心だが、3) には印 (第二次探検将来品項目5) やチベット文入りの仏画などが保管されている。4) にも絵入りの経典や木簡数点があるようだが詳細はあきらかでない。チベット文献のほとんどは、1), 2) においてつぎのように分類・保管されていた。⁽¹⁹⁾
⁽²⁰⁾

(14) Or.8212/ 194 a, b, c (1.2節の記述参照) が該当するようだが詳細不明。

(15) M.A. Stein, *Innermost Asia*, Oxford, 1928; repr. New Delhi, 1981, pp.134, 173, 1055, 1086, Appendix R, Plates VII, CXXX, CXXXI.

(16) *Innermost Asia*: p.615.

(17) *Innermost Asia*: pp.447-449, 461, Appendix R, Plates CXXXI-CXXXIV.

(18) *Innermost Asia*: pp.45-46, Appendix L, Plate 46; T.Takeuchi, "Old Tibetan Rock Inscriptions near Alchi," H.Uebach and J.Panglung (eds.) *Tibetan Inscriptions in Ladakh: Studia Tibetica* III, München, in press.

(19) e.g. Har. 048. (*Innermost Asia*: pp.1052, 1055).

(20) 1997年に調査する予定である。

India Office Library and Records

1) Ch. ナンバーをもつ敦煌出土文書は、72冊にわけて (vols.1-73, ただし vol.41 はない) 本の形に綴じられ、漢文との二言語文書は vol.B として箱に入れられている。(1996年初めから本を順次解体しもとの写本の形にもどして箱に入れて保管する作業が進みつつある。)

2) “Paper Documents from Miran” のタイトルがついた2冊の本に *Mirān*, *Mazār Tāgh*, *Khādalik* 出土の紙文書482点が綴じられている。今回のカタログの主体であり、現在すべてもとの写本の形にもどし修復がおこなわれている。

3) 木簡約2300点が¹1から57の番号を付けた箱に入れられている。ただし、Box 57 は行方不明。Box 51-56 には “Stein 3rd Expedition” と記されている。

4) *Khara-khoto*, *Etsin-gol* 出土の紙文書の主体は、7冊の本に綴じられている。その他に綴じられてない文書が “Stein 3rd Expedition” と記された箱に入れられている。これ以外にも、India Office Library の保管庫のなかに *Khara-khoto* や *Etsin-gol* 出土文書が数点散在しているのをみつけた (いずれもカタログ化されていない)。

5) コータン語文書はガラスのプレートにはさんで保管されているが、そのなかに数点のチベット語文書がある。また、“*Khotanese New Fragments*” と記された箱のなかに実際はマザールターグ、カーダリク出土のチベット語写本があるのを発見した (いずれも今回のカタログに含まれる)。

Oriental Collections

British Museum の Department of Oriental Printed Books and Manuscripts が改組されたものだが、ここに入った東洋語文献はすべて受け入れ時のグループごとに Or ナンバーがつけられている。Or ナンバーは内容に関係なく図書館に受け入れた順につけられたものだから、番号が大きくなるほど新しく入ったものということになる。現在 Or.1 から 12000 位まで使われているようで、各番号の文献群の内容を簡単に記した手書きの本が India Office Library にある。

スタイン将来本の大部分は3度にわけて搬入され、各々 Or.8210, Or.8211, Or.8212 の番号がついている。Or.8210 が第二次探検将来、Or.8211 が第一次探検将来、Or.8212 が第三次探検将来とされているが、かならずしも厳密ではなく、とくに Or.8212 には明かに第二次探検将来のチベット、ウイグル、ソグド文書が含まれている。⁽²¹⁾ これらの3グループの後にも小規模ながら何度かにわたってスタイン将来の写本が運び込まれている。

スタイン将来の写本が British Museum と India Office Library に分けられたとき、チベット文書は原則として後者に入り、前者には漢文や多言語文書がおもに入れられた。したがって、Oriental Collections にはまとまったチベット文献はなく、これまでほとんど注意を引かなかった。しかし、敦煌藏経洞、Mīrān, Mazār Tāgh, Toyuk などから出土したチベット文書が漢文やサンスクリット写本に混じって相当数含まれているのが今回の調査で明かになった。

1) Or. 8210

第二次探検将来の敦煌藏経洞出土の漢文文書が主体である。Or.8210 中の文書は、S1, S2 のようにいわゆる S 番号がつけられている。⁽²²⁾ そのうち S1-6980 は Giles のカタログがあり、⁽²³⁾ 残りの S6981-13677 中の漢文非仏教文献 (S13624 ま⁽²⁴⁾で)は榮新江教授のカタログが最近出版された。Or.8210 中には以下のような敦煌出土のチベット語文献が含まれている。S2228, 7133, 8550, 9223, 9286, 9323B,

(21) 第二次探検将来品が第一次より先の受け入れ番号をもっているのは、スタイン将来品が British Museum に最初に運び込まれたのが、第二次探検の後(翌年)の1909年だったからであろう。当時の状況は明かではないが、探検の順次に従って将来品が搬入されたのではなくかなりの混乱があったらしい。

(22) この S 番号がスタイン文書全体につけられた S[tein] 番号として、P[elliot] 番号と対比するものとししばしば誤解され、混乱を生じている。S はたしかに Stein を表すようだが、S 番号は実際には Or.8210 の下位番号にすぎない。

(23) L.Giles, *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tun-huang in the British Museum*, London, The Trustees for the British Museum, 1957. スタインが第三次探検で将来した敦煌本(卷子)570点も Or.8210 ならびに Giles Catalogue に含まれているらしい。

(24) 榮新江編著『英国図書館藏敦煌漢文非仏教文献残卷目録』香港敦煌吐魯番研究中心叢刊之四(新文豐出版公司, 1994)。

10646, 10647, 10649, 10828A, B, 11335, 11401-09, 11718, 12321, 12818.⁽²⁵⁾

2) Or. 8211

第一次探検将来の漢文文書が主体。1-991 は Chavannes により公刊された。⁽²⁶⁾
その内 956-961 にチベット文書が4点ある(今回のカタログに含まれる)。992-3326 には漢文やカローシュティの木簡など雑多なものがあるがまだカタログ化⁽²⁷⁾されていない。この中にはいまのところチベット文書を一点も見いだしていない。ただ、第一次探検将来のエンデレ出土チベット文書が所在不明で、この中にある可能性もあるので再調査したい。

3) Or. 8212

第三次探検将来品が中心といわれているが、実際には第二次探検将来品も含みかなり雑多である。多言語文書を中心とした 1-195 には Barnett のリストがある。⁽²⁸⁾ そのうち 194a, b はチベット語契約文書,⁽²⁹⁾ 194c (2点) はチベット語仏典である。いずれも敦煌藏経洞出土。196-199 は未使用。200-477 は漢文木簡,⁽³⁰⁾ 478-855 は漢文紙文書。いずれも Maspero によって公刊された。856-1360 はカタログ化されていない漢文文書である。1361-1927 には、漢文、サンスクリット、チベット、コータン、ウイグル、ソグドなど雑多な小断片が集まっている。出土地も Domoko, Mazār Tāgh, Kucha, Toyok, Khara-khoto など多様(敦煌以外)。この中には古チベット語文書105点(今回のカタログに含まれる)、Khara-

(25) S2228, 7133 については、Takeuchi, *Contracts* (上掲注12) 参照。その他は未公刊だが、すでに調査をすませているので折をみて発表したい。

(26) E. Chavannes, *Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan Oriental*, Oxford, 1913.

(27) "Or.8211 Supplementary Shelflist" という題のタイプライトされたリストが、"Provisional List of Fragments - Maspero Uncatalogued" というタイトルの草稿本の中に含まれている (OIOC の Reference book shelf にある)。

(28) Barnett, L.D. "List of MSS from Eastern Turkestan," *OSR*, 19. b.

(29) Takeuchi, *Contracts* (上掲注12) : Texts 40, 47.

(30) Henri Maspero, *Les documents chinois de la troisième expedition de Sir Aurel Stein en Asie centrale*, London, The Trustees of the British Museum, 1953.

khoto 出土のチベット語版本 1 点⁽³¹⁾が見つかった。全断片が 7 つの箱に分置され、箱の中では、2 ないし 4 点ずつビニールのサックに入れられサックの表面に Or. 8212 ナンバーが貼り付けられている。しかし、サックの中で断片は自由に動き重なり合ったりして、ナンバーがどの断片を指すのか同定できない。さいわい OIOC の書架に “Provisional List of Fragments—Maspero Uncatalogued” というタイトルの手稿本があり、その中に照合表(ただし 2 種類の異なるもの)が見つかった。研究協力者として同行した吉田豊氏(神戸市外国語大学)と調査の結果、最初につけた 1361-1927 の番号に一部重複があったので、別の人が後に付けなおしたことが判明した。ただ、改訂版にも一部不可解な空白があるが、準拠すべき唯一⁽³²⁾の資料なので、それと照合してすべてのチベット語断片の Or ナンバーを決定した。

4) Or. 9615

チベット語文書一点がコートン語文書 11 点とともにガラスのプレートに入れている。「Altan Khan が Khadalik の近くで見つけた(スペースあき) Keriya 14/4/24」と書かれた紙が挟まれている。(今回のカタログに含まれる)

India Office Library and Records と Oriental Collections は、1990 年末に合併して Oriental and India Office Collections (略称 OIOC) となった。大英図書館本館と大英博物館西側の Store Street にあった Oriental Collections の建物を売却して Waterloo に近い Blackfriars Road にある India Office Library の建物(Orbit House)に合流したのである。チベット語のみならず東洋語写本が一箇所に集められた点便利になった。今回のカタログの対象も両方のコレクションにまたがっていたので、統合は歓迎すべきことであった。それに伴い、後述するように、旧

(31) 2 fragments: Or.8212/ 1914 = K.K. II. 0279. SSS.

(32) その直後に郭鋒氏が同文書群中の漢文文書のカタログを出版した(『斯坦因第三次中亞探検所獲甘肅新疆出土漢文文書』甘肅人民出版社, 1993)。しかし郭氏は “Provisional List” を参照することなく恣意的にナンバーを付与している。多種類の文書の集合に対して各言語ごとに勝手に番号付けをすると大きな混乱を産むことになるので避けるべきである。

India Office Library 蔵のチベット文書にも新たに Or ナンバーを付与することにした。なお、1999年までには、OIOC も British Library 本部とともにロンドン北西部 St. Pancras に建設予定の新しい British Library Building に移る予定である。

1.3 スタインコレクションのチベット語写本は出土地と材質からつぎのよう⁽³³⁾に大きく分けられる。

A. 敦煌蔵経洞出土紙文書

B. シルクロード南道(ミールン、マザールターグなど)出土紙文書

C. シルクロード南道(ミールン、マザールターグなど)出土木簡

D. カラホト、エチンゴル出土紙文書

このうち A, B, C がチベット帝国(吐蕃)期とその直後(7-10世紀)に書かれた古チベット語文献(Old Tibetan texts)である。D はより後期に属し本稿の主題からずれるが、この機会に言及しておきたい。

D はチベット語文献史においてユニークな位置を占める文書グループである。チベット語文献はおおきく7-10世紀の古チベット語文献(中央アジア出土)と13世紀以降の古典チベット語文献(チベット各地、北京等)に分けられる。前者は写本、後者は版本が中心である。カラホト、エチンゴル出土文書群(11-15世紀ごろ?)は両者の中間に位置する。版本もかなりあるが写本がおおい。写本ごとに古チベット語文書の綴り字法と古典チベット語の綴り字・スタイルが異なる濃度であられるので、組織的に比較研究すれば palaeography による年代推定も可能になるだろう。写本の形態もヴァラエティがあり、古チベット文献にあった貝葉(pothi)、卷子(scroll)にくわえ、蝴蝶装、袋とじの冊子本も出てきている。チベット文献の言語・綴り・スタイルなど各面における変化の相が読み取れるのである。

(33) チベット文を含んだ絵、壺、印、近世以降の版本などは除く。

歴史資料としての価値もたかい。10-12世紀初はチベット史ではいわゆる暗黒の時代といわれる。中央チベットでは仏教が衰え、東西両端で仏教が維持されたとされるが、これらの文書はチベットの東にさかえた青唐王国さらに西夏王国におけるチベット仏教の証である。とりわけ西夏仏教について大きい意義をもつ。西夏仏教に対するチベット仏教の影響はしばしば指摘されているが、実際西夏時代ないしその直前にどのようなチベット仏教があったのかはほとんど追及されていない。カラホト等出土のチベット文書がそれに答えを与えてくれることはまちがいない。たとえば、1995年にセントペテルスブルグを訪れた際、大判の pothi の片面にチベット文経典（般若経）、裏面に西夏文経典が手書きされたものを見つけた。これは西夏時代のチベット仏教と西夏仏教の関係を示す重要な資料にちがいない。チベット文の方が、古チベット語文書特有の綴り字法、スタイルをかなり保持しているのも興味深い。いまちょっと言及したが、セントペテルスブルグにあるコズロフコレクション中にもスタイン本の数倍にのぼるカラホト、エチンゴル出土チベット文書が保管されている。残念ながらスタイン本同様これまでほとんど手が付けられていない。その研究には仏教チベット文献学の知識にくわえ古チベット語写本学の訓練も必要だが、スタイン、コズロフ両コレクション中の貴重な資料が今後注目され組織的に研究されることをつよく希望する。

古チベット語文献に話しをもどそう。Aグループについては上述したように Vallée Poussin と東洋文庫のカタログがある。B,Cグループについては、Francke⁽³⁴⁾と Thomas によりカタログ作成の準備が進められていたようだが実現せず、Thomasが選択した一部(全体の約5分の1)が公刊されたのみである(TLTD)。筆者はB,C両グループのカタログ作成を依頼されたが、同時進行は不可能なので今回はBグループ(紙文書)を対象とすることにしたのである。

(34) Cグループについては、各木簡の特徴を簡単に記述したカードが作成されている。Bグループについては次節参照。

2. カタログ作成プロジェクトの経過

前述したように、筆者が1989年に旧 India Office Library で初めてミーラーンやマザールターグ出土のチベット文書を見たとき、それらは2巻の書物の形に綴じられていた。両方の巻に“Paper Documents from Miran”というタイトルが付けられていたが、一巻には Mīrān (site I) 出土文書が265点、もう一巻には Mazār Tāgh 出土文書212 + Khādalik 出土文書4 + Hassār B 出土文書1の計217点が含まれていた。両巻ともカバー、綴じともに半壊の状態にあった。文書は網に挟まれた形で各頁の紙に貼り付けられているためほとんど判読不可能な状態であった。そこで最初の作業として、本を解体し網をとり、文書を一点ずつプレートにのせる作業をおこなうことにした。

1992年に再訪したところ、確かに文書はプレートに入れられていた。しかし裏打ちの紙によって裏面の文が見えなくなってしまった。さらに、文書番号が複雑（例 M. I. xxviii. 0034. b.）なため多くが誤って転記されていた。さいわい Francke が作成したカードがあったので、それと照らし合わせてすべての文書の番号を訂正確認する作業にかなりの時間を費やすことになった。同時に TLTD とも対照したところ、TLTD に載っている文書数点がみあたらない。ということは、2巻本以外にも文書があるはずである。そこで旧 India Office Library の書庫を探索した結果、64点のチベット文書がはいった箱がコータン語文書と一緒に保管されているのが出てきた。同時に、11点のチベット語文書がコータン語文書と一緒にプレートに入れられていることもわかった。

この過程で今回のカタログを当初の2巻本にとどまらず、「スタインコレクション中の敦煌以外の中央アジア出土の古チベット語紙文書」の網羅的なカタログとする方針がかたまった。そこで旧 India Office Library のみならず Oriental Collections に散在するすべての該当文書の探索を開始した。その結果、Or. 8211 グループ中に4点、Or. 8212 に105点、Or. 9615 に1点がみつかった。このうち

(35) 紙に貼り付けて緑色の本の形にしてあるがタイトルはない。

Or.8212 については前述のように Or number を確定する作業も必要だった。1992年から1994年にわたる探索の結果、合計718点という予想以上の文書がリストアップできた。まだ若干の失検があるかもしれないが、ほぼ網羅的なものと考えて間違いない。

これらの文書のカタログ化作業と平行して、写真撮影のため再修復を行なうことになった。今回は旧 Oriental Collections の修復部 (Oriental Collections Conservation Studio) の松岡久美子さんが担当して下さることになった。松岡さんは文を覆い隠していた裏打ちの紙をすべてはがし、文書の表面の汚れを可能なかぎり除去して下さった。文書のおおくは表面が黒ずんで文字が判読でなくなっており、大英博物館で infra red などの光学器械を試してみたが大きな効果はなかった。ところが TLTD や Serindia に数点含まれている写真と照合すると古い写真の方が現物よりはるかにきれいで鮮明である。松岡さんによると、写真撮影の後1950年代におこなった最初の修復作業の際、文書にゼラチンを塗ったのが時を経て黒ずんでしまったとのこと。修復の結果が裏目に出てしまったのである。これらの黒ずみも松岡さんはできるかぎり除去して下さった。また今回の修復作業をとおして相当数の断片の同定と接合にも成功した。現在これらの成果をカタログにとりいれる作業を写真撮影と平行して進めている。

3. カタログの概要

今回のカタログ出版の主目的は、1) これまで存在さえ知られなかった文書群を学界に提供する、2) 解読困難な断片を利用しやすい形にデータベース化することにある。そのためつぎの情報を提示することをめざした。

- 1) 全文書のベーシックな記述 (文書学的特徴・内容・テキスト)
- 2) 全文書の写真
- 3) 簡明な統一番号と原文書にアクセスするための照合表
- 4) 内容による文書の分類
- 5) 固有名詞およびキーワードによる索引

6) 全テキストの音節索引

カタログを利用する人は、4), 5), 6) によって自分が興味ある文書を捜し、1) でそれについてのより詳しい情報を得、2) の写真と照合してカタログのテキストの読みを確かめる。さらに必要があれば3) によって原典にあたることができる。

文書のほとんどが断片のため内容の同定(4)は容易ではないが可能なかぎり同定ないし推定の結果を示すことにした。テキストの読み(1, 6)も、内容の解釈とあいまって初めて文字の読みが決まることがおおい。その意味で各文書のテキストの読みは時間をかけるほど精密になる。しかし今回はテキストの存在そのものを知らしめるのに意義があるので、あえて暫定的な読みを提示することにした。

写真(2)については、読みにくい断片をできるだけ鮮明な写真にとるにはかなりの費用がかかるため、British Library 側でも逡巡があったが最終的にすべての写真をとることになった。そのかわり、出版費用をよそでさがすことになり、東京にあるユネスコ東アジア文化研究センター(CEACS)の好意によりCEACS と British Library の合同出版が可能になった。

もうひとつの大きな問題は文書番号(3)である。

3.1 出土地と文書番号

文献学者ベリオが敦煌石窟から価値の高い文書を精選したのに対し、ミラーン、マザールターグなどの遺跡から発掘された文書が考古学者スタインの手で整理されたのは幸いだった。スタインは発掘した文書・物品に周到的出土番号(site number)を小断片にいたるまで付している。それらは次例のように各文書の出土地を明確に示す。

site number

M. I. ii. 20. a.

説明

M. = Mīrān, I. = site number 1

ii. (Roman l.c.) = room number 2 in Site 1

20. a. = a text number found in Room 2 Site 1

M.Tagh. a. VI. 0025.	M.Tagh. (no space between) = Mazār Tāgh a. = refuse accumulation point a VI. = section 6
M.Tagh. i. 0024.	i. (Roman l.c.) = room number 1
Bal. 0166.	Bal. = Balawaste
Dom. 0128.	Dom. = Domoko
E. i. 19.	E. = Endere
H. B. iii. 2.	H. B. (space between) = Kichik-hassār “the Little Castle” or Hassār B
Ile-dong. 024.	Ile-dong. = Īle-dong
Kao.	Kao. = Kara-khōja
Keriya	Keriya
Kha. vi. 14. a.	Kha. = Khad. = Khādalik
Khad. 052.	Khad. = Khādalik
Samp. 040.	Samp. = Sampula
Toy. I. ii. 09. h. 2.	Toy. = Toyuk

ところが、スタインの精緻な site number は余りに複雑なために間違いやすく、引用や記憶に適さなかった。さらに後世の研究者はそれを誤解・誤用するようになった。たとえば、M. I. は Mirān I の site 1 出土を示す番号だが、⁽³⁶⁾ I が大文字の i ともとれるため全体で Mirān I の略と解されるようになった。後述するように、Mazār Tāgh が誤って M.T. と略されるようになったのがそれを促進した。その結果、F.W. Thomas ですら M. I. を Mi と書くようになった。⁽³⁷⁾ しかし、スタインの番号体系では、Mi は別な遺跡(カラシャル地方の Ming-oi)を指すのである。

(36) Miran には遺跡(site)が15あり、I からXVまでナンバーがつけられている。チベット文書のほとんどはそのうち site I から出土したので M.I. のナンバーがついている。site XIV から出土したチベット文書も若干数あり、それらは M. XIV. のナンバーをもつ。

Serindia: Plans 29–30 参照。

(37) e.g. *TLTD* vol.3: p.193.

Mazār Tāgh もスタインは M.Tagh と略するが、現代のチベット学者やコータン語学者のおおくは M.T. と書く傾向がある。⁽³⁸⁾しかし、M.T. はスタインの体系では Mazār Toghrak の略であり、実際 Mazār Toghrak 出土の文書も相当数あるのだ。このような新たな略記の導入は混乱をまねくのことになり賛成できない。スタインの元の site number を正確に保持する必要がある。

ただスタインの site number が複雑で引用に適さないのも確かである。だから各文書ないしグループごとに統一番号を考えざるをえない。筆者がカタログ作りをしている文書群は出土地もとりわけ多様で site number も複雑なものの集合である。それらは小グループごとに大英図書館内部の保管番号 (requisition number) をもっているが、それらもバラバラで統一されたものでない。すでに二種類の番号があるうえに新たな番号を与えるのは気がすまないが、結局今回のカタログ作成にともないすべての文書に統一番号を付すことにした。

新しいカタログ番号 (Takeuchi number) は、出土地を地理的に西から東へ、北から南へ並べた順序に基づいている。⁽³⁹⁾チベット文書の出土地をこの原理にそって並べると以下ようになる。

A. The sites in the Khotan region

- 1) Mazār Tāgh (= M.Tagh.): a site to the north of Khotan.
- 2) Sampula (= Samp.): a site to the east of Khotan.
- 3) Domoko (= Dom.): a site to the east of Khotan.
- 4) Khādalik (= Kha. = Khad.): a site to the north of Domoko.
- 5) Īle-dong (= Ile-dong.): a site near Domoko, located in the area of ruined sites north-east of Domoko of which Khādalik marks the center.
- 6) Balawaste (= Bal.): a site to the north of Domoko.
- 7) Keriya (= Keriya): a site to the east of Domoko.
- 8) Har (= Harding): Har. is not a site number, but the name of the person who obtained the mss. The mss were found somewhere in the Khotan region.

(38) コータン語文書については、大英図書館内部でもそれが慣習となりつつある。

(39) Poussin カタログのように内容によって分類して番号づける方法も考えられるが、今回のように大部分が内容の同定が不可能な断片の場合効果的でない。

9) Endere (= E.): a site to the east of Niya.

10) unnumbered.

B. The sites in Mīrān

1) Mīrān Site 1 (= M. I.)

C. The sites in the Turfan Depression

1) Kara-khōja (= Kao.)

2) Toyuk (= Toy.)

3) Hassār B (= H. B.) or Kichik-hassār “the Little Castle”: ruined shrines near the south-east corner of the Turfan Depression.

D. Unidentified

A1) から始めて D に至る順に文書を配列した。各 site の内部では、元の site number の順にしたがう。

カタログ中のすべての文書は、1) 統一カタログナンバー (Takeuchi number), 2) site number, 3) British Library における保管ナンバー (requisition number) の 3 つの番号を持つことになる。これらの間の対照表はカタログ中に示される。BL で原写本をみたい人はカタログに示された requisition number で請求することになる。

ところが、カタログの主体である旧 India Office Library 所蔵のミーラーンやマザールターグ出土文書には requisiton number がなかった。そこで Graham Shaw 氏と相談の結果、Or ナンバーでまだ未使用の Or. 15000 番号をこのグループにあてることとなり、カタログの順にそって筆者が Or. 15000/ 1-546 の番号を新たに付与した。

3.2 おわりに

今回のカタログの対象となった古チベット語文書の 3 分の 2 以上は、これまで学界に存在すら知られていなかったものである。ほとんどが断片で、しかも多くが極めて小さいため、個々の情報量は必ずしも高くないかもしれない。しかしこれらは 8-9 世紀のシルクロード南道を中心に、敦煌とはことなる社会・言語・民族的背景をもとに産みだされた文書群であり、多角的な分析をくわえ

ることで敦煌文書とはちがう資料価値をもちうる。断片群とはいえこれがその世界で唯一の大規模なコレクションなのである。今回のカタログと写真の公刊によって一世紀ちかく眠っていた貴重な文献群がひろく知られ活用されることを願っている。